

人と時間をつなぐ場所—港南区の将来

郊外班 森田智美 横澤直人 田口遼 北川まどか 森本時生 小島裕一

1. コンセプト設定の背景

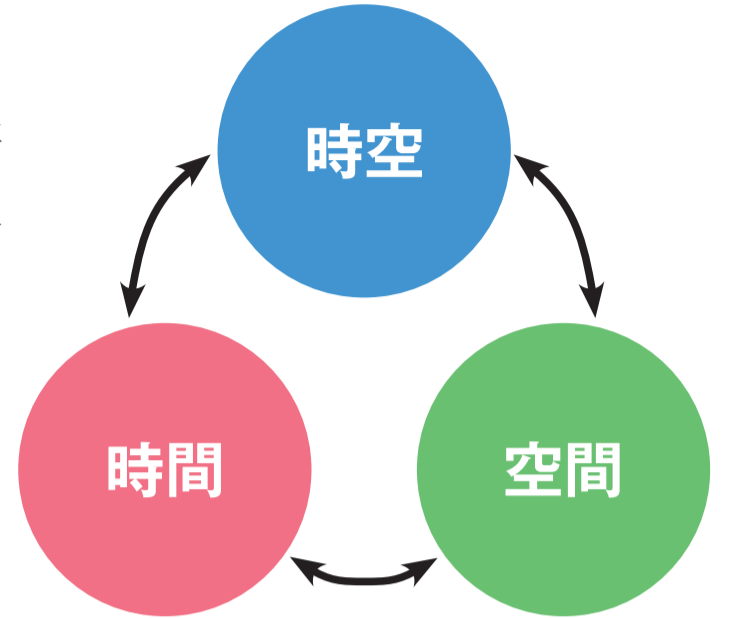
港南区一帯は、開発当時の「人の住居を創出する」という社会的要請のもと、後々の町の発展を考慮することなく、目の前の需要・経済性を満足するために発展した。その結果、住宅やマンションが多数並び立つことになった。

それから数十年たった現在、町の発展を考慮しない発展による矛盾が表面化しだし、町の少子高齢化に拍車をかけている。

こうした現状を打破するために、町としての連続性を担保する必要があると考えた。従来の郊外施策で不十分だった点を補完し、将来的な世代更新が自然となされるような町づくりをする必要があると考えた。

そうした思いを込め、「人と時間をつなぐ町」をコンセプトに掲げた。

この際、町にある問題を「空間」「時間」「時空」の3つの観点から考察し、それぞれをカバーした解決策を提示することを主眼に置いた。これにより、各観点における問題が解決されるとこれらの相互作用によって、この町がより魅力的に生まれ変わるのではないかと考えた。



2. この街にある課題 —空間・時間・時空—

空間

地形を端緒とした住みにくさ

◆交通：車やバスに依存（地域全体として）

港南区は住宅街が坂の上にあるため、お年寄りが買い物、通院で移動する際、バスや車が非常に重要な手段となっている。また、通勤においても最寄り駅まで距離がある地域などがあるため、バスなどを利用率が高いのが現状だ。さらに、近年の車離れの傾向や公共交通機関の維持への不安から、新しく入居する人たちにとっても大きな障壁になり得る点である。

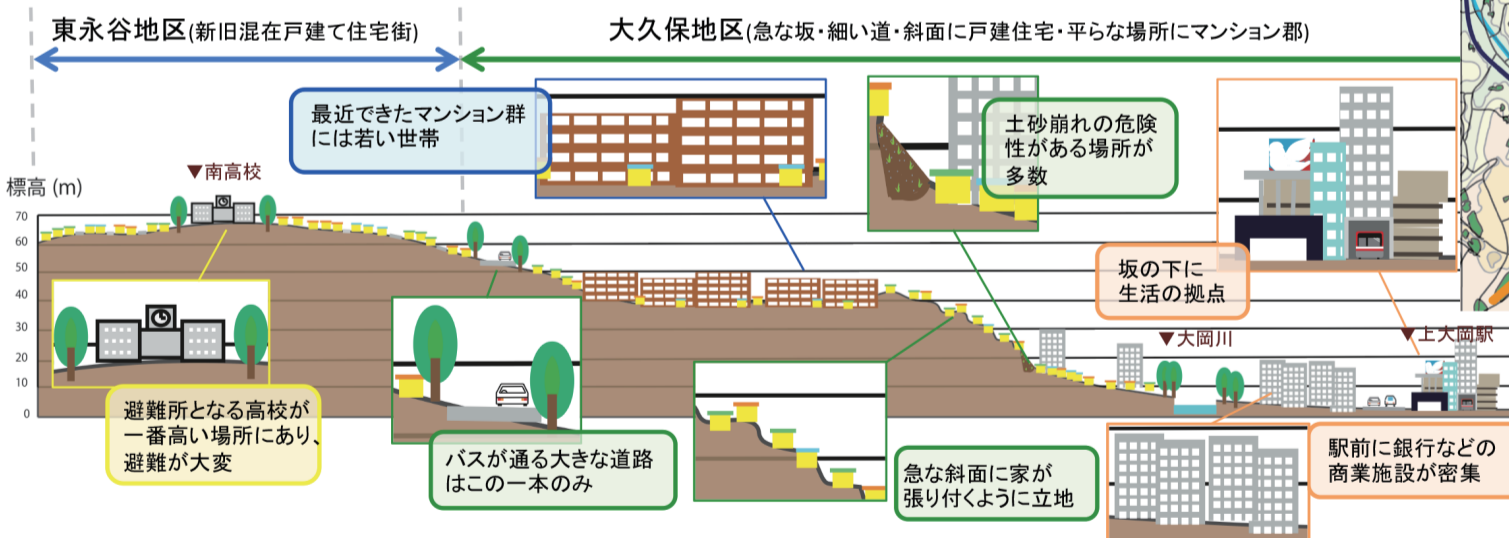
◆災害：災害の弱さ

土地の確保の観点から、学校のような災害時に避難所となる施設が坂の上に乗建てられることが多く、災害時に高齢者などが坂を上って避難しなくてはならな

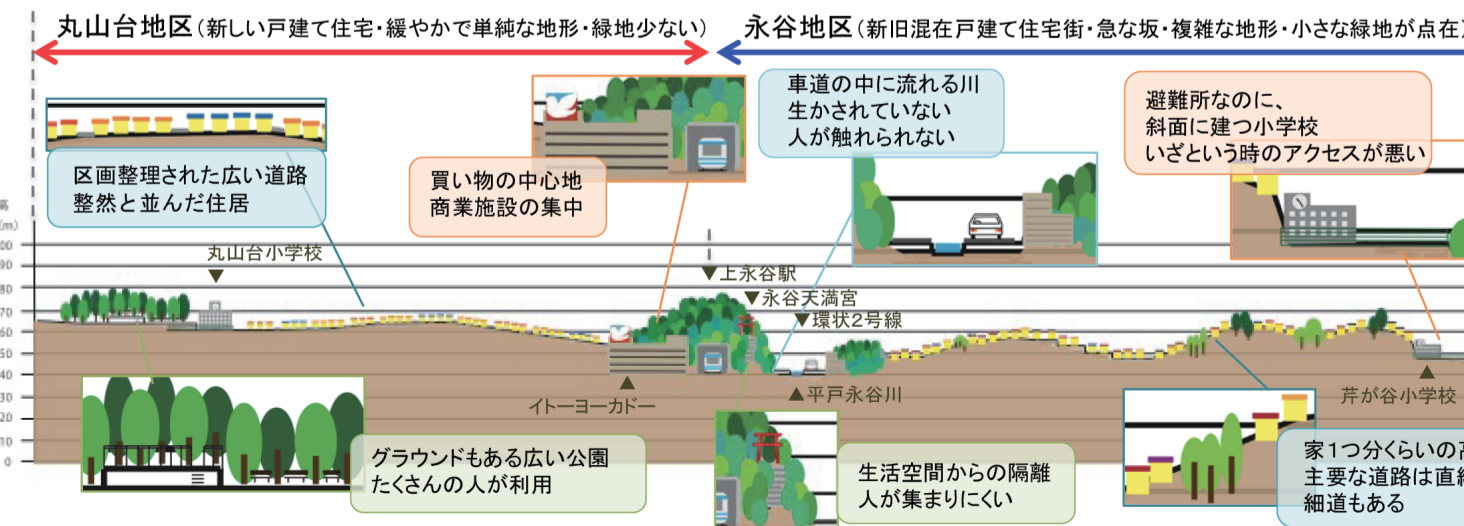
い。また、山という地形が住宅にふさわしくなく、既に土砂崩れの不安がある場所が点在するなど災害の脅威にさらされている地域がある。

◆土地利用

郊外は閑静な住宅を実現するため、住宅地の用途は法律によって厳しく制限され、コンビニやスーパーのような最も基本的な商業施設さえ設置できない。



【全体を通して言えること】
斜面の上に住居があり買い物をするときは斜面の下の拠点まで降りないといけない
細い道路が中心
急斜面による生活の不便さ、災害時の危険性



【全体を通して言えること】
本来人が住むはずではない場所(斜面)に住居地を作ったことによって引き起こされる様々な弊害がある。
住宅と生活の拠点(駅や商業施設)との水平距離・垂直距離が大きい。

時間

長期的展望の欠落と新陳代謝の停滞

◆時間の連続性が途切れる

- ・計画的に建てられた港南区の団地は、建物の老朽化と住民の高齢化を同時に迎えている。(ex. 築40年の野庭団地)
- ・少子化による学校の統廃合 (ex. 野庭の小学校や高校の統合)
- ・土砂災害リスクの高い斜面に形成された密集住宅地は一瞬にして崩れ落ちるリスクを内包。(ex. 大久保の土砂災害危険地域)
- この街の成立以来積み重ねられてきた時間が断絶する気配。

◆デジタルな時間が休日や住まう時間に侵入

途切れ途切れの時間感覚に支配された通勤生活は、ふとした瞬間に大きな空虚感に襲われ、自分の"生"を見出せず、将来への大きな不安を抱くことがある。(ex. ミドルエイジ・クライシス)

◆絵のような、時間が止まった街 (=時間の対流がない)

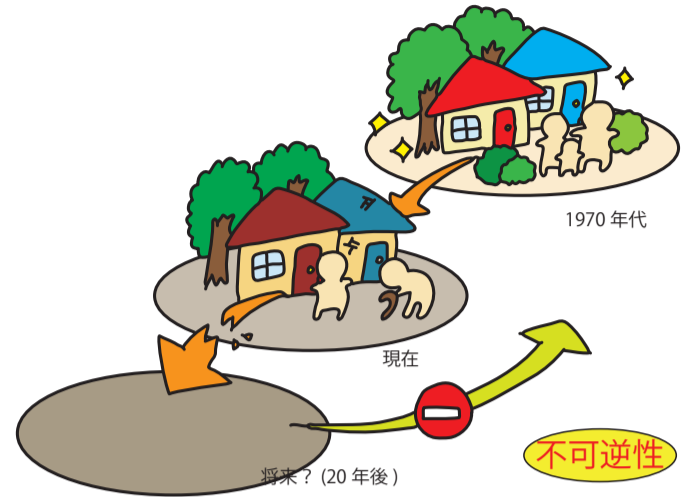
たった数十年というめまぐるしいスピードで人工的に開発された街には、開発時にプランナーたちが描いた理想は確かに投影されているが、実際にその場所に住まう人々の思いはまだ根付いていない。それが「特徴のない街」に感じてしまうひとつの原因。

(ex. この街で好きな場所は？と聞かれて、思い浮かばない住民たち。所々にあ

る公共空間は、計画者によって作られた場所ではあるが、必ずしも住民の生活の一部となっているわけではない。)

◆四季に対する感覚 (= 時間の循環、対流) が得られない

随所に植えられた植物は、管理の効率性から不自然に画一化されており、時間の循環や連続性が感じられない原因となっている。(ex. 街路の樹木、公園、人があまりいない緑道や親水空間)



時空

時間感覚の没個性

◆地域にとっての時間

川の流れから逸脱した親水空間。

(ex. 永谷天満宮脇の池、環状2号線添いの水辺)

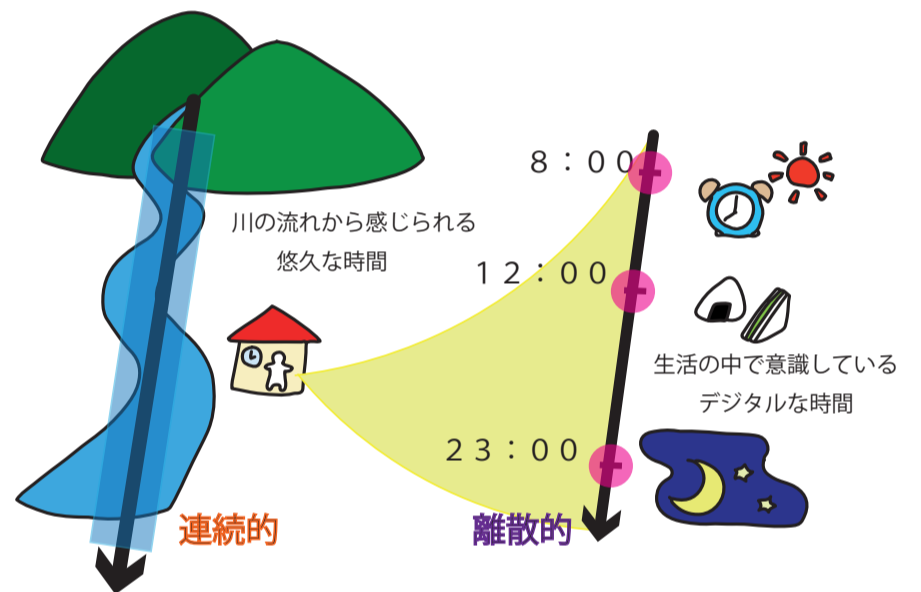
川の特長である連続性・循環性・一瞬性が欠如した、淀んだ空間へと転落している。川の流れ=時間の流れという連想から考えれば、デジタルな時間感覚に支配された日常で感じるできない時間の連続性を感ぜられる空間であるべきでは。

◆住民一人一人にとっての時間

昔遊んだ場所が今も残っているという現在から過去へのまなざし

直接のつながりはない自分より若い人たちが、昔の自分と同じ場所で同じことをしている = 存在の連続性

→単純な機能や利便性という議論には還元できない情緒的な要素こそ、その人にとってこの街が特別な場所でありうるために必要なのではなかろうか。



3. 「時空」を意識した街づくりとは？

◆学校の統廃合は避けられないが、廃校の学校に植わっていた木を残して連続性を維持する

◆太陽の動きが感じられる場所をつくる (夕日)

太陽は、時間の対流を感じさせてくれる要素。

公園で日が沈む時、高台を活かす

→景観と時間を結びつける

◆建物の更新で連続性が消えないよう、何かしらの痕跡を残したい

ex) 学校や公園、道路のようなパブリックなもので、「昔からずっとそこにあるもの」を残す

◆四季折々の植物を植え、無機質な淀んだ川から流れを感じられる川に戻す

水の流れは時間性を強く感じさせる。

多くは暗渠になっており、水辺に近づきにくいという現状から、人目につく場所に水辺を整備する

◆商住近接

規制緩和により、高台にある住宅街にスーパーやコンビニのような生活必需品の拠点となり得る商業施設のみ建設を認めることを提案したい。その際は、閑静な住宅街という特質を維持するため、外観、音などが周囲の環境を壊さないよう十分な配慮を要すると思われる。

◆減災対策

台風などの災害の発生が予測できる場合は、避難所を早めに開設し、避難を呼びかける。また、土砂災害においては危険地域に対する宅地建設の許可審査を厳格化し、土砂災害防止の地盤改良などを求める。

